

令和7年度 第3回 生駒市公益活動アドバイザーハイブリッド会議録

開催日時 令和7年12月5日(金) 13:30~15:30

開催場所 生駒市市民活動推進センターららポート研修室

出席者

(アドバイザー) 佐藤由美氏、田中晃代氏、土坂のりこ氏、山納洋氏(五十音順)

(事務局) 市民活動推進センター所長 大垣、主査 高田、係員 西田

(傍聴者) なし

案件

1 令和7年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」進捗状況報告

2 ららポート主催事業の報告

3 次年度補助金の運用について

以下、発言要旨

案件1 令和7年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」進捗状況報告

(1) 生駒南第二小学校 果樹園プロジェクト

【事務局から報告】

(アドバイザー) 大きな課題があるようには見えないが、事務局側として課題認識はありますか。

(事務局) 果樹栽培をきっかけに地域の交流を増やすという目的がありました。夏季の天候の影響もあり、収穫がうまくいかず、参加が広がりづらかったと聞いています。一方で小学校でのレモンケーキ作りなど、新たな接点ができておらず、今後機会が広がれば人数も増える可能性はあると思います。

(アドバイザー) 交流が目的であれば、収穫が不作でも別の形で交流機会を設ければ良いので、助言の余地はあまりなさそうに感じます。

(アドバイザー) 次年度は栗の木を育てたいということですが、レモンにこだわっているわけではないということでしょうか。

(事務局) はい。種類にこだわらず、栗の木も新たな候補とされています。

(アドバイザー) 栗でも実が取れない可能性もあり、継続していくには難しさもあるように思います。何か工夫をされているのでしょうか。

(事務局) 防鳥ネットを購入するなど対策はしておられます。ただ水枯れなど夏場の管理は人手の問題もあり、完全には防ぎきれないところもあります。品種や育て方をモニタリングしながら、校庭に適したやり方を模索しているものと考えます。

(アドバイザー) 農業の充実を目指しているのか、収穫物を使った交流を目指しているのか、方向性がやや見えにくいように思います。たとえば、堺市ではレモンの木を育て、商品化・アイデア募集など6次産業化まで展開している事例もありますが、そこまでは目指していない理解でよいでしょうか。

(事務局) 堺市の取り組みはすでにご紹介していますが、校庭のスペースも限られており、規模拡大は難しいと考えます。栗の木は、子どもたちから「加工された栗しか見たことがな

い」という声が上がったため、いがの状態から知る経験が、発見や学びの機会になるという意図も含まれています。

(アドバイザー) 教育的効果も期待している認識でよいでしょうか。

(事務局) そのとおりです。

(アドバイザー) 別の案件でも地域の声を聞いたが、高齢化と「小学校がなくなる不安」が大きな課題になっていると思います。果樹園が交流の軸になり、保護者や住民も巻き込めるような活動設計ができれば、世代交流のきっかけにもなると思います。レモンケーキの授業だけでなく、果樹の育成過程そのものが学校と連携できると、より意義があると感じます。

(2) 一般社団法人 IDS

【事務局から報告】

(事務局) 活動趣旨は「非常時に各避難所へのメンタルヘルスの充足のため、キッチンカーを派遣する」ことにあるとしています。その際に各自治会とのスムーズな連携を取れるように、9月から11月にかけて、各自治会のイベントに参加し、活動趣旨を周知されています。あわせて、本市危機管理課とも連携し、11月1日から2日にかけて実施した本市避難所宿泊訓練において、災害時を想定したキッチンカーによる炊き出しをされました。当日は団体の名入れテントを設置し、本市まちのわ補助金で調達した「災害支援協力」のビブスを団体スタッフが着用し、白ご飯、お味噌汁など温かい夕食を提供されました。訓練全体では250名の市民参加があったと聞いております。

(アドバイザー) 団体の活動がとても順調なようで安心しています。去る11月1日から2日にかけて、生駒市宿泊訓練を実施され、このときに団体がキッチンカーによる炊き出しに参加されたということですが、この費用は団体が負担したのでしょうか。宿泊訓練におけるガス代、材料費は生駒市が用意するっていうことだったと思いますが、団体側のガスとか電気とかの持ち出しがあったのでしょうか。

(事務局) 持ち出しの方はなかったものと思っております。

(アドバイザー) そうしますと、本当に協働という形で、この宿泊訓練が行われたということですね。素晴らしいと思います。

(事務局) ありがとうございます。

(アドバイザー) 行政とよく繋がれるっていうところが、この補助金活用の非常に良いところで、テーマごとに、いろんな行政の担当課が顔を出してくれるっていうのはありがたいかなと思います。

(3) NPO法人こどもゆめひろば

【事務局から報告】

(アドバイザー) 参加者の報告がありましたが、内訳が気になります。対象は小学生以上とのことです
が、実際にはどの年代の子どもが来ているのでしょうか。また楽器経験のある子と初めて触れる子の割合も気になるため確認したいです。初めて楽器に触れた子がいるなら大きな成果になると思います。

- (事務局) 「楽器経験がないこどもたちがほとんど」とのことでした。成果として整理してもらうよう伝えます。
- (アドバイザー)「楽器準備等の手配が困難」との記載が気になります。その状況はどのようになっていますか。
- (事務局) 現在は指導者や保護者が所有する楽器を持ち寄り融通していますが、課題を受け、10月末からホームページ等で寄贈募集を開始されています。足りない楽器は寄付で貰えるよう募集を強化されています。担当者によると「保護者は楽器経験者が多い」とのことです。
- (アドバイザー)保護者が経験者というのは大きなポイントですね。眠っている楽器を再利用するという発想は環境面でも意義があり、発展性を感じられます。
- (事務局) 団体の寄贈募集チラシには「壊れても修理して活用する」とのメッセージが掲載されています。口コミで寄贈が広がっているという情報も得ています。
- (アドバイザー)保護者の演奏グループが生まれ、世代間交流につながる可能性もありますね。
- (アドバイザー)1回の練習あたりの参加の人数が減っている一方で、練習回数が増えていると思いますが、指導者の負担感はどうでしょうか。運営能力は大丈夫でしょうか。
- (事務局) 現在は、17名の参加者で、月8回練習を実施されていますが、現状はこれ以上の参加者を受け入れることはできないと聞いています。本市からも、広報支援の提案をいたしましたが、既に口コミで定員いっぱいの状況であり「これ以上の周知は必要ない」と団体より回答を受けています。よって、現在の体制で何とか運営されているものと考えています。

(4) シフクノプレイス

【事務局から報告】

- (アドバイザー)以前、調理場所を確保するのが大変だということを聞いていましたが、何かそういうった場所の問題はありませんか。
- (事務局) 現在の調理場所は利用交渉され、そのスペースにオープンスターを持ち込み、事業実施されています。公共施設の調理室を使うという選択肢もありますが、今はオープンを持ち込んででも、この南チロル堂という場所で事業実施するのがベストとお考えです。
- (アドバイザー)他の場所でも実施されているということでしたが、そちらも場所はちゃんと確保できているのでしょうか。チラシの配布を色々なところで行ったということですね。
- (事務局) そうです。
- (アドバイザー)会場は南地区だけですね。はいわかりました。
- (アドバイザー)第3回の開催場所はチロル堂でしたが、この場所が良かったから、いろいろ展開できたっていう話もあると思います。先ほど場所の話がありましたけど、これがまた別のところでやれば違うのか、あるいは良いのか悪いのかなど、場所性みたいなものっていうのは非常に重要だと思います。第4回の開催場所は未定ということですが、今度は対象者が違うということなので、その対象者に合わせて場所を考えることになりますか。

- (事務局) そうですね。南チロル堂は、この「シフクノ 1Day カフェ」の想いに賛同され、調理スペースの利用を快く受け入れていただいているほか、普段ここに通っているこどもたちへの事前の周知など広報活動にもご協力いただいているところです。これから新たな場所で実施するとなりますと、やはり団体としても、自分たちの活動の趣旨とか、想いを言語化していく必要がありますので、実際にその場所で実施できるのかも含めて一緒に検討していけたらと思っております。
- (アドバイザー) 場所性は非常に重要で、対象者と場所との関係性のようなものを戦略的に考えていく必要があると思います。
- (事務局) ポスティングなど南地区であれば様々な広報手段をお持ちですが、中地区や北地区となると、どちらに案内していくか迷われている状況です。その点も含めて一緒に場所を検討できたらと思っております。
- (アドバイザー) 先ほどの報告を聞いていて主催者の方が大切にされているもの、例えば来場者数を重視されているのか、交流そのものを価値としてとらえておられるのか。その間にずれがないかをお伺いしてもよいでしょうか。
- (事務局) 現状を拝見すると、まずはこどもたちがお茶を提供するという役割で地域とつながることが果たされている段階にあると感じています。一方で、多世代の交流が自然に生まれたり、こどもたちが地域とのつながりを実感したりするような展開については、今後どのような形が合うのかを一緒に考えていく余地があるかなと思っています
- (アドバイザー) 主催者の方に対して、「こういうことも考えられますよ」といった形でお話しするのは、簡単ではない場面もありそうですね。
- (事務局) そうですね。代表は、現在の取り組みに大きな手応えを感じながら進めておられるので、今の良さを大切にしつつ、活動の幅や今後の可能性について、どのようなタイミングで対話していくか時期を探りたいと思います。

(5) スキマダンスクラブ

【事務局から報告】

- (アドバイザー) 伴走者(=補助金を出す側の市)と団体の意向が一致しない場合、関わり方が非常に難しいと感じます。特に、本人たちがそれで良いと思って活動している場合は難しいですね。
- (アドバイザー) 生駒市外の参加者がいる状況を踏まえると、市の補助金を使っているからと言って「伴走支援を強化すべき」とは限らないと思います。「生駒市民の利用や市民交流を義務づけること」が目的だったわけではないはずです。市民活動が多様に醸成されていく、生み出されていくという観点で見れば、必ずしも伴走は必要なく、「こうした活動を支えた」というだけで補助金の成果として十分と言えるのではないかでしょうか。
- (アドバイザー) 審査基準に「公益性(不特定多数の市民の利益につながるか)」がありますが、「参加者を増やすつもりは強くない」との話も聞かれたため、場合によっては審査基準と齟齬が生じる可能性があります。審査基準を見直す必要があるのではないかでしょうか。
- (事務局) 公益性は意識されているものの、参加が広がっていないという認識です。活動を自分の仲間だけに閉じたいわけではありません。

(アドバイザー)不登校の状況は幅が広いと思っています。ダンスはとても良い活動だと思いますが、参加のハードルが高いようにも思います。

(アドバイザー)「どこまで支援すべきか」の線引きが課題ですね。参加費は1人2,000円～3,000円ということですので、ある程度、費用を払って参加されているように思います。もっとハードルの低い軽い参加ができる選択肢(「ダンスを見るだけ」「気軽に寄れる」など)があると、裾野が広がるのではないかと思います。

(6) 真弓ロビンズ

【事務局から報告】

(アドバイザー)来年度もこういった活動が「まちのわ補助金」で申請される可能性があると思います。

(事務局) 先ほどアドバイザーからもご指摘いただいたところですが、地域活動に資するもので「公益性がある」「開かれた活動」であれば対象となるのではないかと思っております。

(アドバイザー)また、先ほど説明のあった、こどもたちのユニフォームなどに使うための資金を得るためにチャリティーイベントなどを企画するとか、団体自身でもお金を稼いでいくスキルを磨いていくとか、この補助金の交付を受けたとしてもやるべきことがあるということを、これから補助金申請される方たちにも伝えていく必要がありますね。

(事務局) 幸いにも20数名を超えるこどもたちが当団体のハンドボール体験会に参加されていますし、立ち上げ間もないという団体ですので、資金については、これから課題になり得ると考え、専門家よりアドバイスをいただきました。チャリティーイベントを企画実施することには、代表からやってみたいというご意見もいただいているです。

(アドバイザー)地域移行に伴って、無理なくやれる活動と、このハンドボールのように市民が頑張らないと、サポーターが頑張らないと維持できない活動にわかれるのかなと思っているのですが、そのわかれ目はどの辺にあると考えたらよいでしょうか。

(事務局) 本市の場合は土日の部活動だけ中学校の運営から切り離して、体育協会や指定管理者などが運営をする形になります。このため、市民が頑張らないと維持できない活動というわけではありません。

(アドバイザー)学校にもハンドボール部はあるのでしょうか。

(事務局)これまでどおり中学校にもハンドボール部があり、平日は中学校で運営しますが、土日は地域移行します。

(アドバイザー)つまり、土日まで活動しようと思わなければ、平日の中学校のハンドボール部で足りるということになりますか。

(事務局)そういうことになるかと思います。

(アドバイザー)頑張ろうっていうと、参加のハードルが上がるということですね。

(事務局)個々のこどもたちや親御さんの判断になると思います。

(アドバイザー)はい。一旦ありがとうございます。

(アドバイザー)保護者向けアプリの利用状況や内容とかわかりますか。

(事務局)教育総務課が保護者向けのアプリの運用をしておりまして、各課で主催している事業を、小中学校生の保護者に周知したいときに申請をいたします。なお、アプリの運用の主管は当センターではないため、利用状況についてはお答えすることができません。

(アドバイザー)わかりました。

(7) 一般社団法人 和草

【事務局から報告】

(アドバイザー)本来の目的とは異なる参加者が増えているとの報告がありましたが、「本来の対象ではない参加者が来ていること」が悩みというのは、主催者側の課題認識という理解でよいでしょうか。

(事務局) そのとおりです。

(アドバイザー)もともと「引きこもり等の生きづらさを抱えた人の居場所づくり」がミッションだと思いますが、対象を広げたいのか、それとも公益性を担保するための方針転換なのか、団体として整理はできているのでしょうか。

(事務局) 当初は「引きこもりの方」が対象でしたが、専門家相談の場で「仕事や子育てでしんどさを抱える人も対象にしたい」という意向が表明されたところです。このため、募集の表現を広げたところ、「自然に触れたい元気な親子」が多く来る結果となったようです。

(アドバイザー)つまり、あまり広げすぎたくないという気持ちが主催者側にあるという理解でよいでしょうか。

(事務局)しんどさを抱えた方が安心できる場を守りたいという意識があると思います。リーフレットも作成され、活動内容や思いを言語化し、配布を始める予定と聞いています。

(アドバイザー)目的が複数ある場合は、曜日やコースで分けるのも一案だと思います。例えば休日は楽しむ目的の人向け、平日は静かに作業できる場、など区分することで収支のバランスも取りやすいのではないかでしょうか。

(事務局)もともと平日は対面が苦手な人が黙々と作業できる日、休日は会話を交えた活動日というすみ分けがありました。広報のあと、元気な親子の申込が増え、現状では平日は参加が少なく、祝日等に多く来る状況となっています。

(アドバイザー)課題欄に「天候に左右され、収穫できず次の計画が進まない」とあります、これは団体が感じている課題という理解でよいでしょうか。

(事務局)大豆収穫や味噌づくりの計画を立てていたが、天候により実現できなかった事例があります。台風や長雨計画により左右されることもあります。

(アドバイザー)農業は計画どおり進まないのが本質であり、一律の計画に落とし込むこと自体が難しい面があると思います。課題というより構造的な問題ではないかと思います。

(事務局)農業・漁業など自然相手の活動は日々判断するものですので、補助金申請上の計画と現実のギャップにどのように配慮するか、考えたいと思います。

(アドバイザー)多くの助成金では、野外活動の場合「雨天時の代替案」を記載することとなっています。今回のように収穫できない可能性がある事業は、事前か変更時に「代替案」を用意してもらうことで、申請者・事務局双方の負担が軽減されるはずです。

(アドバイザー)最終的に収穫できなければ目的が達成できないとするのであれば、リスクが高いと思います。収穫成果だけに依存せず「プロセス自体に意義がある活動」に設計すれば、収穫が不調でも「途中の交流が成果」と言えるでしょう。今後の時代背景としても、リスク分散は必要だと思います。

(8) おはなしかい.奈良

【事務局から報告】

(アドバイザー)高校生や比較的若い世代の人にも命の大切さを語ってもらう。この若い世代の人たちが、パネルディスカッションやトークをしていけば、そのお友達を呼んできてもらえます。ターゲット層をもう少し明確にして、その人たちにスポットライトを当てるという必要かなと思っています。この事業は数字だけで成果を測ることが難しい側面もあります。たとえば、参加者に毎回少しずつでもアンケートをとりながら気持ちの変化や質的な変化、考え方といったものをテキストにするなど、数字ではない部分で目標を掲げる必要があると感じているところです。

(事務局) ありがとうございます。

(アドバイザー)このクロストークが11月24日に行われたときの参加者数や属性はわかりますか。

(事務局) 3名が助産師、1名がこの団体が別の地区で実施されるときに主催されるカフェの方、あともう1名がららポートの職員です。

(アドバイザー)残念ながら本当に来て欲しい方には、刺さらなかつたということになるでしょうか。

(事務局) そうですね。

(アドバイザー)その辺に難しさがあるような感じもしますね。

(アドバイザー)このプロジェクトは、当初から手段と目的にズレがある気がしていましたが、やってみて、やっぱりちょっと違うよねとなつたときに、どう考えるのかという話だと思います。そういうことも含めて見守ればいいのかなと個人的には思います。

(アドバイザー)なかなか難しいですね。例えば対象が看護学校の学生さんや、将来の医療技術者になる人だと目的が一致すると思うのですが、それは多分、代表の方が思っていることは違うものだろうなと感じています。

(アドバイザー)試行錯誤を通じて前に進むこともあると思います。あらかじめ完成形を求めすぎることは、市民活動の成長を妨げる要因となってしまうこともあります。市民活動は、試行錯誤を重ねながら段階的に発展していくものだと考えています。

(事務局) ありがとうございます。

案件2 ららポート主催事業の報告

【進捗状況を事務局から報告し、アドバイザーに意見を尋ねる】

(山納氏)

・今後5~10年の地域社会は、公益活動をNPOや市民が担う割合を増やしていくかなくてはいけないと予想される。現状の市民活動推進センターの支援の方向性は、「担い手づくり」という観点では最適とは言い切れないのではないか。

・他の自治体では、「提案公募型委託事業」のような、市民が市に企画を提案し、採択されれば委託事業として実施する制度を導入している。これによって、市の事業の代行型支援ではなく、「自ら企画・運営・実装する力」をもつ人材が増える設計になっている。

・一方で現在の生駒市では、「市が事務局を担う前提で参加する」市民が一定数存在しており、このままでは市のカウンターパート人材は育たない可能性がある。この方法では、地域がもたないかもしれないでの市民と行政の関係性の再定義が必要。

・大東市の事例では、行政のミッションを理解した外部組織があり、担い手形成の一つの参考となる。また、生駒市の副業人材募集に多数の応募があった例もある。これらは、公益活動の担い手を育てるために「ボランティア支援のみを強化する」のではなく、行政のカウンターパートとして外部に専門性と主体性を持った組織を形成するルートもあり得ることを示している。生駒市においても幅広く可能性を検討する必要がある。

(土坂氏)

・テーマ型やプロジェクト型の活動創出は、市民活動の芽を育てる入口としては有効。ただし「プロジェクトが増える＝担い手が増える」ではない。これだけを続けていても出口戦略がなければプロジェクト型の取組が生まれるだけで、担い手が増えていくわけではない。

・担い手育成に必要なことは、

- ① 事業化できる選択肢や視野が広がるきっかけの提示(助成金・委託・法人化・継続財源など)
- ② 多様な連携先の提示(行政各課・民間・専門家など)

をしながら、「覚悟」や「本気度」の醸成の機会(当事者意識の形成)が必要である。伴走支援を目的化せず、団体自身が成果の意味や活動の広げ方、事業としての可能性を模索していく過程に寄り添った結果として、団体の成長や自立につながっている状態が理想である。

・中間支援組織が行政と対等な協働関係の視点を持つためには、活動の出発点や形成過程において、行政から一定の距離を保ちながら主体性を育んでいくことが重要である。行政主導で中間支援組織を立ち上げた場合、結果として行政の補完的役割にとどまりやすく、対等な協働関係を前提とした中間支援としての機能が育ちにくい側面がある。

(佐藤氏)

・他の課の取組をみていても、生駒市は行政が非常に丁寧で、市民からの信頼が高い。それは一方で、「行政にいえば何とかしてくれる」という行政依存型の意識が生まれやすい土壤でもあるということ。これは、市民による自立的活動に移行しにくい要因の一つ。

・ニュータウン構造により地域ごとの価値観の核が弱く、「行政任せではなく自分たちでやる」という発想が育ちにくい。そのため、行政が段階的に役割を移行しつつ、市民活動を束ねる中間セクター的な民間組織を育成していくことが鍵。地域性を踏まえると、「行政が動かないから市民が怒りを原動力に立ち上がる」というルートではなく、行政の信用力を活かし、みんなのためになることをしたいという人から自然にリーダーを引き出していくアプローチが現実的ではないかと感じている。

・サラリーマン世帯が多く「自分たちで稼ぎながら事業をまわす」「収益を上げて成長する」という感覚が強くない地域性もある。しかし、事業性の芽を持つ活動者もいるので起業的な芽を持った団体を育てることが有効。

・市民活動推進センターは団体同士のマッチングだけでなく、府内の課同士や自治会・地域拠点との接続を行うことで、市民活動の基盤形成に寄与できるのではないか。現在の取組の良し悪しではなく、「強みをどう生かすか」という視点で、行政内外をつなぐ機能がさらに重要になると考える。

(田中氏)

・「若手育成」や「新しい担い手づくり」という言葉は行政側・既存団体側の問題意識としては理解でき

るが、地域には行政の支援に頼らず、自ら活動を立ち上げ継続している主体的な活動者も一定数存在している。

- ・自立的活動者は行政に相談に来ないため発見しづらく、「担い手育成」「育成される側」といった語り方を嫌う傾向がある。しかし、そのような主体性の高い活動者の存在は他団体にとっても刺激となりうるし、自立的活動者と支援を必要としている活動者をつなぐ仕組みが実現できれば、価値観の変化や活動の成長につながる可能性がある。
- ・行政が支援すべきは「活動そのものの伴走」よりも、自立的活動者と支援を必要とする活動者が出会い、つながる機会の設計ではないか。
- ・今後は「担い手育成」という言葉・考え方そのものも見直し、「活動育成＝行政が背負う」のではなく、行政は場や人を案内・接続する役割を担うことによって、結果として活動の広がりや担い手の増加につながる支援体制を構築することが現実的であるといえる。

案件 3 次年度補助金の運用について

【進捗状況を事務局から報告し、アドバイザーに意見を尋ねる】

◇先駆性(評価項目)について

- ・「先駆性」の評価項目を削除する必要はない。生駒市には公益活動のプレイヤーが多数おり、既に先駆的な取組を行っている団体も存在するため、先駆的取組を目指す方向づけ自体に問題はない。
- ・先駆性をどのように判定するかの共通認識を審査側で揃える方が重要。地域課題に対し独自の切り口・アプローチで取り組んでいる場合も評価対象になり得る。
- ・先駆性＝「成功が保障された取り組み」ではない。新しさ・工夫・これまでにない試行を評価すればよい。実現性は別の項目で判断すべき。
- ・新たに顕在化した地域課題に対し、いち早く取り組む姿勢も含めて評価できるようにしてはどうか。例えば、部活動の地域移行、災害時支援、コロナ後の孤立・不登校支援等、地域課題の変化に着目した活動は、新規性の一つと言える。

◇要綱の変更タイミング・周知について

- ・制度が定着するまでは大きく変更しない方が望ましい。スケジュールの変更があるようなら、今年度の採択済み団体も含めてPR・情報提供を丁寧に行う必要がある。